

三論宗における仏法の眞実義について

高岡善彦

仏法の眞実義は経・論においてさまざまに説かれるが、『中論』や三論宗において眞理は、不生不滅等の「八不」と深く結びついている。なかでも三論宗の吉蔵（五四九―六二三年）によると、大乘仏教の主要な經典に説かれる甚深の仏法は、すべて不生不滅等の八不が展開したものにすぎない、という。

第一章 「中論」の八不と三論宗の八不

『中論』において八不は第一章（観因緣品）の冒頭に掲げられるだけでなく、その内容は『中論』の全篇にわたって広く論じられている。『中論』において八不は「空性」と緊密に結びついていて、八不は「空性」の論理的説明根拠になっている。

三論宗は『中論』の思想を継承しているから、八不は空性を説明する根拠とされている。しかし、三論宗は梁の三大法師の「定性の空」を否定し、「不二中道」や「非有非無の不二」を仏法の眞理をあらわす用語として用いている。その教義の中で、八不は「不二中道」や「非有非無の不二」を論証する根拠とされる。三論宗において八不は「不二中道」や「非有非無の不二」とより緊密に結びついている。

このような観点から、第一章においては、『中論』と三論宗における、八不・空性・不二の教義内容や相互関

係を考察する。

一 八不を論じる意義

鳩摩羅什訳の『中論』第一章において、八不偈は次のように漢訳されている。

不生亦不滅

不常亦不斷

不一亦不異

不來亦不出

能説是因縁

善滅諸戲論

我稽首禮佛

諸説中第一

(大正三〇・一中および下) (『中論』卷一)

梵文でみるとこの二偈は互いに独立しているわけではなく、「不生不滅・不常不斷・不一不異・不來不出」という八不は、第二偈の「善滅諸戲論」という第二句と共に、「因縁」にかかる修飾辞になっている。

この八不について『中論』の註釈者である青日のような説明を付している。修行が進んで、仏教の深法を受ける能力を持つ者に対して、仏は「一切法は不生・不滅・不一・不異等(八不)である」という因縁の相を説かれた。これは一切法が「畢竟空」であり、「無所有」であることをあらわしている、と。

爲「已習行有」大心「堪」受「深法」者。以「大乘」説「因縁」相。所謂一切法「不生・不滅・不一・不異等」。畢竟空・無所有。
(大正三〇・一中) (『中論』卷一)

『中論』において八不によって示される「畢竟空」は、諸法の眞実の姿をあらわしており、「無所有・無所得」は仏教者の目指すべき境地を示している。

一方、三論宗の吉蔵は『中観論疏』卷二・本において「八不の意義」を次のように論じている。

八不者蓋是正觀之旨歸。方等之心骨。定佛法之偏正。示得失之根原。迷之即八萬法滅冥。若夜遊。悟レ

之即十二部經如對白日。

(大正四二・二〇中) (『中觀論疏』卷二・本)

「正觀の旨歸」は無上・無想の智慧がおもむく所を意味しており、仏法の眞理はすべて「八不」に含まれていて、八不から仏法のあらゆる教義が生まれてくることを示している。「方等の心骨」とは、「八不」が大乗仏教の中核概念であることをあらわしており、「仏法の偏正を定める」とは、さまざまな仏教者達によって説かれる仏法の偏・正が、「八不」によって判別されることを主張している。また「得失の根原」は、八不という「仮説」を正しく理解するかどうか、迷悟の分かれ目になると説いている。

ここで吉藏は八不を衆生済度の側面から捉えている。「正觀の旨歸」といい、「方等の心骨」といい、また「仏法の偏正を定める」とは、仏・如來が教えを説く「教の体」となるもので、吉藏は八不を「教法」の観点から把握しようとしている。

三論宗は隋・初唐の仏教であり、南北朝時代の旧仏教を、有所得の仏教とみなして破斥することを目標としている。そのために「八不」という概念を活用しようとした。三論宗は思想の改革を口論んできて、対論の相手は「成実論師」に代表される中国の旧い仏教であった。梁の三大法師といわれる莊嚴寺僧旻(四六七―五二七)・光宅寺法雲(四六七―五二九)・開善寺智藏(四五八―五二二)等は「成実論師」とも呼ばれ、「成実論」をよりどころとした有所得の思想を抱いていたとされる。

『中論』において八不が冒頭に掲げられる理由のひとつとして、吉藏は「有所得」の思想を洗淨することであると述べている。諸法を対立的な「二」とみる考え方を「有所得」といい、諸法が相互依存して「不二」であるとみる思想を「無所得」という。この考え方は『大品般若經』卷二十一にもとづいている。

須菩提白佛言。世尊。云何名有所得。云何名無所得。

佛告須菩提。諸有二者是有所得。無有二者是無所得。

(大正八・三七三下―三七四上) (『大品般若經』卷二二)
 吉藏によると、三論宗が興る以前の中國仏教は、毘曇宗も、成実宗も、大乘の一部も諸法を「二」とみる有所得の思想であつて、「中道の正觀」という無所得の境地に達することはなかつた。

所以然者。為三論未出之前。若毘曇・成實・有所得大乘。及禪師・律師・行道・苦節。如此之人皆是有所得生滅斷常(八迷)障中道正觀。
 (大正四二・三二一上) (『中觀論疏』卷二・末)

ここにいう「有所得」の人には、禪師・律師・行道・苦節などが含まれている。禪師とは「心の乱を息め静を求め」ものをいう。この禪師がなぜ有所得の人かといへば、ひたすら「禪」の境地を求めするために「禪」に執着するからである。「行道」の人とは、ひたすら「非道を棄てて正道を求めんと欲する人」であつて、「道」に縛られ「道」に執着するから「有所得人」である。同様に律師は「威儀を欠かず淨戒を守護する」ために、「律」に縛られ「律」に執着する。これらのひとびとはすべて「有所得人」であつて、三論未出の前の「有所得」の仏法であると主張する。ところが、彼らも三論教義を学び修し、白らの「有所得」を破し、「無所得」を得ることができれば、諸法実相の体を悟ることができる。

このように「無得正觀・中道正觀」とは、有所得を破して無所得を得るための正しい觀法のことであり、空性という実相を悟ることと、「有と無の相即」という仏法の「大用」を悟ることを具体的な内容としている。

また、吉藏は『中觀論疏』卷二・本において、『維摩詰所說經』を引用しながら、八不の意義を別の角度から論じる。仏法を極めた仏・如来は、般若と方便の「二慧」に基づいて生ずる。また、二慧は世俗諦・勝義諦という「二諦」によつて発生する。さらに二諦は「八不」によつて有所得の二諦から、無所得の二諦に転換する。換言すると、「八不→二諦→二慧→衆聖」の関係が成立し、「八不」は諸仏・法身を生みだす根源になつてゐる。

波若(般若)方便トス爲ス十方三世諸佛法身之父母也。以下衆聖託ニ二慧ニ而生ス上二慧由ニ二諦ニ而發リ。二諦因ニ

八不^ニ而正^{ナリ}。即知^ニ。八不^ハ爲^ニ衆教之宗歸^{ニシテ}。群聖之原本^一。

(大正四二・二〇中) (『中觀論疏』卷二・本)

二諦は仏・如來が法を説く「教法」の体であると同時に、「境(所照)」とも名づけられる。二諦は二慧によって照らされる「境」であり、境は「実相」を意味している。一方、二慧は実相を照らし出す「能照」である。このように、二諦は「教法」という役割のほかに「実相」という意義をも担っている。

如來常依^ニ二諦^ニ説^レ法^ヲ。故^ニ二諦^ヲ名^レ教^ト。能生^ニ二智^ニ。故^ニ二諦^ヲ名^レ境^ト。

(大正四五・五五中) (『大乘玄論』卷四)

成実論師達の有所得の二諦は「八不」によって無所得の二諦に転換する。二辺にしばられていた二諦が、八不によって中道の二諦に転回する、というのが吉蔵の教えである。

由^ル八^ニ不^ニ故^ニ世諦^ヲ成^ニ中道^ヲ。即世諦義正。由^ル八^ニ不^ニ故^ニ眞諦^ヲ成^ニ中道^ヲ。即眞諦義正。

(大正四二・二二中) (『中觀論疏』卷二・本)

三論宗において「八不」は格別な位置を占めている。

二 八不・空性・中道の関係

八不と空性と中道の意味内容は、「中論」と三論宗との間でいくぶん異なったニュアンスを持っている。この問題について『中論』の主張は明快であるが、三論宗の主張は複線的・重層的である。まず『中論』の考え方を考察してみたい。

『中論』の帰敬偈において、「不生不滅等の八不」はあらゆる二辺を離れていること意味し、これは「因縁」に対する修飾辞であった。因縁とは諸法が仮に和合して相続することをいい、仮に和合して相続する諸法に自性というものは存在しない。諸法に自性のないことを「無自性」とも「空性」ともいう。また、あらゆる二辺を離

れていることは、「中道」と表現される。このように、「中論」において八不・因縁・無自性・空性・中道はほとんど同義語として用いられ、諸法といわれる現象世界の眞実の様相を言葉で表現した仮説である。

三論宗において「八不」は眞理なのか教法なのかを考察してみたい。この問題に対する三論宗の考え方は複線的である。

仏・如来の教えはすべて理性を言葉で表現した眞理であつて、目指すべき方向を指し示す「教法」であり、衆生を理性に向かわせるはたらきを持つ。三論宗において、八不・空性・不二・非有非無などの金言は、眞理であると同時に仏の教法であると考ええる。この点で三論宗の教義は複線的である。

八不が「教の体」である側面を、「中観論疏」巻一・中は次のように説いている。

就牒^チ牒^{スル}ニ 八不^{ハツ}一分^ニ爲^ス三別^ニ。第一^ニ正牒^ニ八不^ニ明^ス所申^ノ教體^ニ。 (大正四二・九中) (『中観論疏』巻一・本)

さらに、第二偈の前半「能く是の因縁をとぎ、善く諸の戲論を滅す」は、八不について「教法の用」を説いており、衆生を悟りに導くという。また、「我れ稽首して礼す仏を諸説中第一なり」とは、仏陀とその教えを讃歎するものである。

第二半偈歎^ハ八不^ノ之用^ヲ。第三半偈敬^ヒ人美^ム法^ヲ。 (大正四二・九中) (『中観論疏』巻一・本)

このように、空性や八不などと表現された金言は、理性の一分を示す眞理であり、衆生を理性に導く「教の体」とされる。

次に、諸仏・如来は、凡夫の「有」と聖人の「空」を依りどころとして、「有は不有」であり「空は不空」であるという「非有非無の不二」を説く。このような「因縁の空有」は「空有に非ざる空有」、すなわち「不二中道」である。

依^チ凡^ノ有^ニ説^ケレ有^ト。有^ハ不^レ住^キ有^ニ。有^ハ表^ス不^有ヲ。依^チ聖^ノ無^ニ説^ケレ無^ト。無^ハ不^レ住^キ無^ニ。無^ハ表^ス不^無ヲ。此^レ則^チ有^ノ無^ノ以^テ表^ス

非有非無不二^一。

(大正四五・七八下) (『二諦義』卷上)

因縁空有。即非^ニ空有^ニ空有^{ナリ}。既識^ニ非^ニ空有^ニ空有^上。即悟^ニ空有非^ニ空有^一也。

(大正四五・八七上) (『二諦義』卷上)

このように三論宗は「非有非無の不二」や「不二中道」を「中論」の「畢竟空」とは若干ニュアンスの異なった教義としており、これらが言語を超えた境地を「ことば」で表現する中核思想とされる。

第二章 八不の十条と甚深の仏法

吉蔵の「中觀論疏」卷二・本は「八不^ハ者蓋^シ是正觀之旨歸^ニ方等之心骨^{ナリ}」(大正四二・二〇中)と「八不」を莊嚴していた。さらに吉蔵は「八不の十条」を論じて、「涅槃經」「維摩經」「法華經」「華嚴經」等の大乘經典に説かれる十項目の真実義は、すべて「不生不滅等の八不」に集約されると述べている。

仏教の究極的な真理は共通していて、吉蔵の「八不の十条」は、三論宗の立場から主要な大乘經典の教えを、「八不」というひとつの思想の中に集約しようとする努力のあらわれである。吉蔵は十項目のすべてにわたって詳しい考察を加えているが、ここでは紙幅の制約もあり、「涅槃經の本有今無」と「妙法蓮華經」と「維摩經がいう入不二の法門」の三項目について簡略に考えてみたい。

一 「涅槃經」の本有今無の偈について

「涅槃經」(北本)卷十の第四章(如来性品)の中に、世尊が仏性常住に関して文殊師利に説法される偈がある。吉蔵はこの一偈を取りあげて、三論宗における甚深の仏法を述べようとする。

本有今無 本無今有

三世有_レ_レ_レ 無_レ有_ニ是處_一

(大正二一・四二二下)『涅槃經』北本・卷一〇

この偈の一般的な意味は次の通りである。前半の二句は次のようにいう。仏性は先天的には存在したが現在の自分には存在しない、あるいは、もともとはなかったが今の自分には存在する。後半の二句は前半の二句を否定して、仏性は三世を通じていかなる衆生にも存在し、無仏性という主張は成立し得ない、と述べる。

吉藏はこの偈文もまた、「不生不滅等の八不」に集約されると主張する。まず偈文の前半を、否定(無三世)に裏付けられた肯定(二三世)であるとみる。これは無生滅に裏付けられた生滅と同義である。

上半即無三世三世義。(中略)無三世三世。即是無生滅生滅義。即一重八不。

(大正四二・三〇中)『中觀論疏』卷二・末

偈文の後半は、肯定(二三世)に裏付けられた否定(無三世)をあらわして、「有」と「空」とを超えた「非有非空」の八不に相当するという。

下半明三世無三世。即生滅無生滅。即第二重八不。

(大正四二・三〇中)『中觀論疏』卷二・末

偈文全体としては、「無三世の三世」といい、「三世の無三世」というのであるから、本来の意図は、三世でもなく無三世でもない「中道」を説いている。これは「非二非不二」の八不と同義であり、無所得の正觀を説いている。

無三世三世。豈是三世。三世無三世。豈是無三世。故非三世。非無三世。故名爲中道。若得此悟。名爲正觀。即第三重八不。

(大正四二・三〇中)『中觀論疏』卷二・末

吉藏は『涅槃經』の「本有今無」の偈を借りて、「非二非不二」という甚深の仏法、すなわち三論宗における「無所得の正觀」を説いている。

二 「妙法蓮華經」について

次に「中觀論疏」卷二・末は、不生不滅等の八不と「妙法蓮華經」が共に「空性」という真理を明かすことを論証する。まず「法華經」の教義の中心は「諸法空」にあるとして、「法華經」卷三の第五章（藥草品）から次の二つの文章が引用される。

究竟涅槃常寂滅相、終歸於空。

（大正九・一九下）（「法華經」卷三）

復有住禪

得神通力

聞諸法空

心大歡喜

放無數光

度諸衆生

（大正九・二〇中）（「法華經」卷三）

「法華經」の空性は、横に「八事」を超える「八不」であり、豎に四句を超える真理を指している。このような「空性」は「不生不滅等の八不」に他ならず、共に仏法の真理をあらわしている。

問。此空云何是八不。答。横論則理超八事。豎則四句皆絶。不知。何以目之。強稱為空耳。故知。此空即是八不。

（大正四二・三〇下）（「中觀論疏」卷二・末）

經典や論書は衆生を真理に導くためにさまざまな教義を立てている。しかし甚深の仏法は「法華經」の空性と「中論」の八不に帰着する。

三 「維摩經」がいう入不二法門について

不生不滅等の八不は、「維摩經」の「入不二法門」と同じ思想であり、共に仏法の真理を明かしている。「維摩

『經』において、「二」は生・滅等の対立概念であり、「不二」とは生・滅の対立概念を超越した「無生法忍」である。そして、この不二の境地に入ることを「入不二」と称する。『維摩經』卷中の第九章（入不二法門品）に次のように説かれる。

生滅為不二。法本不生。今則無滅。得此無生法忍。是為入不二法門。

（大正一四・五五〇下）（『維摩經』卷中）

「二」と「不二」とを超越した思想を説くのであるから、不生不滅等の八不と「入不二法門」とは、共通した同一の教えである。

即此八不是淨名入不二法門。

（大正四二・三〇中）（『中觀論疏』卷二・末）

次に吉藏は、『維摩經』卷中の第九章に説かれる「不二の三階」がそのまま「八不の三階」に当てはまると考へる。『中觀論疏』卷二・末が述べる「不二の三階」の要点は次の通りである。第一に、ひとびとは言葉によつて不二を明かすが、まだ不二は無言であるとは論じない。

彼品有三三階。明不二。一者衆人假言明不二。未辨不二無言。

（大正四二・三〇下）（『中觀論疏』卷二・末）

第二に、文殊師利は不二が「無言」であると言葉によつて表現する。

二者文殊雖明不二無言。而猶言於不二。

（大正四二・三〇下）（『中觀論疏』卷二・末）

第三に、維摩詰は不二が無言のことであると弁ずるが、言葉によつて弁ずるのではなく、「無言」によつて弁ずる。

三者淨名辨不二無言。而無言於不二。

（大正四二・三〇下）（『中觀論疏』卷二・末）

『中觀論疏』卷二・末は、『維摩經』の「不二の三階」に準じて、「八不の三階」を次のように論じる。

不二既有三階。八不亦爾。初假言明八不。未辨八不無言。二者明八不無言。而猶言於八不。三、明八不無言。而無言於八不也。
 (大正四二・三〇下) (中觀論疏 卷二・末)

この点においても「維摩經」の「入不二法門」は不生不滅等の八不と同じ思想であり、共に言語表現を超えた「無言」という甚深の仏法を説き明かしている、と吉藏は論じる。

第三章 般若と絶觀の般若

一 絶觀の般若とは

吉藏は般若の本質的な意義を「絶觀の般若」にあるとみている。絶觀とは觀智を断ち切ることをいい、絶觀の般若は修行者が画期的な境地に到達した時に感じる特別の感動を含んでいる。

智慧是知照之名。豈能稱絶觀般若。

(大正四五・五〇上) (大乘玄論 卷四)

この絶觀の般若は、「波若(般若)の体」と軌を一にしている。般若の体は縁・觀を絶するという。「縁」とは所縁のことで智慧が照らし出す境を意味しており、諸法実相を指している。一方、「觀」とは觀智ともいい、事象や理性を明瞭に觀る智慧のことである。すなわち、般若の体は、諸法実相という所縁を絶すると共に、所縁を見極める觀智をも超越している。また、般若の体は言語表現を超越しているが、智慧はなお言語表現のなかにある。吉藏は「智慧」が修行の領域に留まっているのに対して、「般若の体」は「覺」や「証」の境地を示すものと捉えている。

波若體絶縁觀。智慧名主於觀。波若體絶智慧。智慧名主知照。波若體絶名字。智慧則猶涉名言。

菩薩は修行のある段階で般若の体を得て、煩惱と菩提とは相即しており、「貪欲は本来寂滅にして自性清淨である」と覚知する。このとき、実相の「境」と般若の「観」は不二であると正しく理解する。

經（『諸法無行經』卷上）云。貪欲則是道。患・癡亦復然。如是三法中。無量諸佛道。貪欲則是道者。然貪欲本來寂滅。自性清淨。即是實相。如斯了悟。便名波若。豈有實相之境異波若觀耶。故境智不二。

（大正四五・五六上）（『大乘玄論』卷四）

「絶観」は心の転回を伴い、その結果として、「雑染」と「清淨」の境目が消滅すると吉蔵は教えているのである。

二 「絶観」という思想の系譜

絶観の般若は仏・如来の境地に近づいたときに感じる感動を含んでいる。絶観（能縁の観智を断つこと）とはあまり用いられない用語であるが、「絶縁」（所縁の実相を断つこと）と組み合わされて、吉蔵の著作には数ヶ所に用いられている。たとえば『法華義疏』卷三の「如来の智」をたたえる中に「絶観・絶縁」という用語が見られる。

我所得智慧微妙。最第一。又云是法不可示。言辭相寂滅。故如来之智非有非無不二。離人離法。絶観絶縁。一切名言所不能及。故名絶言。

（大正三四・四八八下）（『法華義疏』卷三）

また『維摩経義疏』卷一に、無名相を説く一節で「絶観絶縁」を説いている。

不著不二法。以レ無ニ一・二二故。斯即非レ語非レ默。不レ俗不レ真。絶観・絶縁。何二・不二。

（大正三八・九二一中）（『維摩経義疏』卷一）

そこで絶観という思想の系譜をたどるために、經典の中に「絶観・絶縁」と類似の用語を求めると、『維摩経』卷上に「無縁観菩薩」という菩薩名が記されている。これは釈尊の説法の座に集まった三万二千の菩薩のうち、主な菩薩名を列記する二十五番目の菩薩の名前としてあらわれる。

…明網菩薩。無縁観菩薩。慧積菩薩。… (大正一四・五三七中) (『維摩経』卷上)

吉蔵は『維摩経義疏』卷一において、これらの菩薩名のすべてについて短い註釈をほどこしている。「無縁観菩薩」については次のように釈されている。

無縁観菩薩者。観ニ實相ニ時。内外並冥。縁・観俱寂也。 (大正三八・九二二下) (『維摩経義疏』卷一)

「無縁観」の「縁」とは所縁の実相であり、「観」とは能縁の観智であつて、「無縁観」とは実相と観智とを滅却した極めて深い境地を示している。この菩薩名が吉蔵の「絶観・絶縁」という思想形成に影響を与えたことがうかがえる。

また、『仁王経』卷上の讚仏偈の中に「空慧寂然無縁観」という一句がみられる。

空慧寂然無縁観。還觀ニ心空ニ無量報。 (大正八・八二七下) (『仁王経』卷上)

吉蔵は『仁王般若経疏』卷中・三において、讚仏偈の一句一句に註釈を加えているが、「空慧寂然無縁観」について、「空慧」の境地は所縁も観智もなくなった寂然とした心の状態をあらわすと示している (大正三三・三三三・三三三・三三三)。この一句も「絶観・絶縁」という思想につながっていったであろう。

さらに、吉蔵は『中観論疏』卷三・末に「境と智とを絶す」の教証を五つあげているが、ここではそのうちの二つを考察してみたい。その一つは『六十華嚴経』の「如来性起品」にみられる偈であつて、如来の境地が清浄・寂滅であり、言説を絶していることを説いている。吉蔵は「絶観」の内容をこのようなものとして理解していたことがうかがえる。

正法性遠・離

一切語言道

一切趣・非趣

皆悉寂滅性

一切諸如來

境界亦如來

(大正九・六一五上) (『六十華嚴經』卷三四)

二つめは「大智度論」卷四十三からの引用である。

二智度論釋集散品云。縁是一邊。觀是一邊。離是一邊。名爲中道也。

(大正四二・五〇下) (『中觀論疏』卷三・末)

引用文は「大智度論」「釈集散品」からの取意である。「大智度論」のこの章は空性や般若波羅蜜についてのさまざまに説き、たとえば次のように述べている。

佛是一邊。菩提是一邊。離是一邊。行中道。是爲般若波羅蜜。(大正二五・三七〇中) (『大智度論』卷四三)

吉蔵は「縁是一邊。觀是一邊。離是一邊名爲中道」を「絶觀」の内容と考えていたことが知られる。

吉蔵が論じる「絶觀の般若」という思想の系譜をたどってみた。その淵源は「維摩經」「仁王經」「六十華嚴經」にあることを、吉蔵自身が明かしている。また、「大智度論」の「縁是一邊。觀是一邊。離是一邊名爲中道」が、より直接的な教証であることも吉蔵によって明かされている。この思想が少しずつ表現を変えながらやがて「絶觀の般若」という表現として成熟することになったのである。

むすび

「中論」において八不によって示される「畢竟空」は、諸法の真実の姿をあらわし、「無所有」は修行者が目指すべき境地を示している。一方、三論宗では仏法の真理はすべて「八不」に含まれていて、八不から仏法のあ

らゆる教義が生まれと説き、「八不は衆教の宗帰にして、群聖の原本なり」と説いている。さらに吉蔵は「絶観の般若」を説くが、これは実相と観智を超越した境地を指しており、甚深の境涯に到達した歓喜を含んでいる。それは仏法の真理と直結しており、仏陀の智慧と深く繋がっている。

キーワード 非二非不二の正観、入不二法門、絶観の般若